

寺田 みさこ

振付家・ダンサー

トヨタ コレオグラフィーアワード2014・選評

各作品に対する評価を書く前に、まずは選評基準とその理由について、私自身の考えを述べようと思う。

審査会当日の上演前に、審査基準などについての簡単な打合せが行われたが、その際にくコレオグラフィーとしての評価>と、<ダンサーとしての評価>の違いについて話題に上った。このことは、特に自作自演が多い日本のコンテンポラリーダンスの作品を評価する上で、常に付きまとう問題ではないかと思われる。まず前提として、ダンス作品はダンサーの身体を通してでない限り経験することが出来ない。そして優れたダンサーは作品を越えて観客を魅了したり、ある時には<神懸かり>といわれるようなパフォーマンスを繰り広げ、作品テーマとは別の次元で観客を感動させてしまったりすることがある、と思う。それでも私は<コレオグラフィー>を軸に評価をすることは可能なのではないかと考えている。<コレオグラフィー>という言葉に含まれる具体的な仕事は多義に渡る。例えば<どのダンサーを起用するか>ということも、その1つとして数えられるであろうから、その意味では上記のように、あるダンサーが素晴らしい仕事をした場合、そのことも<コレオグラフィー>の評価ポイントとなるかもしれない。しかし、今回私が重点的に見ようと思っていたポイントは、それとは別に2つある。まず一つ目は、自身のダンスを立ち上げるための方法に対して如何に自覚的であるか、ということ。そして2つ目は、それをどのくらい身体（動き）に落とし込んでいるか、という2点である。その観点から見て、まず一つ目においては塚原悠也さんと楳子びじんさんが、そして2つ目に関しては木村玲奈さんが、私の中では上位に挙がった。

塚原さんの仕事は、ダンスの定義そのものの押し広げ方や、その方法の鮮やかさという意味では圧倒的であるし、また楳子さんの身体に対する視点も、かなり興味深いものであった。それらと比べると木村さんの作品コンセプト自体は、ある意味凡庸なものかもしれない。それでも私が木村作品に最も高い評価を与えたいと思った理由は、正に落とし込み方の深さと強度が圧倒的だと思ったからである。一つ一つの選び抜かれたムーブメントや時間の紡ぎ方に、彼女の思想がぎゅーっと圧縮されているように感じる事ができた。もしかすると、私自身が振付家であるという理由に因る特殊な見方なのかもしれないけれど、私は、振付の過程（方法を見つけそれを具体化するまでの過程）や、あるいは身体や空間からある状態を導きだすに至るまでの過程など、制作現場での緻密な作業は、積み重なり密度となって、結果的に舞台上で目に見えるものになる、と信じている。このような地味で緻密な作業に、最も真摯に向き合ってい

るように思えたのが木村作品であった。では何故私がそのことを大事にしたいと思っているのかについて、次に述べようと思う。

かつて日本のコンテンポラリーダンスの評価軸の1つに、ダンスの歴史と分断された身体の面白さ、というような見方があったように思う。そしていつ頃からか、そのことの限界もささやかれ始め、今、様々な立場の人が、どうすればダンスがより面白くなるかを懸命に考えたり実践したりしている。私自身はダンスの土壌が豊かであるために必要なこととして、1つにはダンスの定義を塗り替えていくような新しい発想が、また一方では、ダンスの歴史（これまでの偉大な振付家たちの仕事）を、身体を通した実践的な形で踏まえた上で、それらを丁寧に乗り越え、独自の方法を発見していこうとするような、地味で緻密な作業を軸にした作品制作、これらが両輪をなすことが重要なのではないかと感じている。このことを、〈サブカルチャー〉と〈メインカルチャー〉というカテゴリーに簡単に分類することは出来ないけれど、少なくともサブカルチャー的な視点に偏り過ぎない評価軸も必要であると感じている。いわゆるコンセプチュアルな作品を評価する一方で、歴史に根付きなおかつ欧米で育まれたメソッドの単なる組み替えや、そのまま踏襲したような形に留まらない新たな方法を見つけていこうとする意欲的な作品に対する評価もまた大切なのではないだろうか。

木村さんは、今回の作品では、まだ決定的な独自の方法論を確立するには至っていないと思うけれど、その可能性は充分にあると思った。そして、そのような振付家が育つことが、また次にそれを乗り越えるべく次世代が育ってくるための土壌になることを期待したいと思うのである。

〈各作品に対する短いコメント〉上演順

■ 振子びじんさん

振子さんの活動には以前から興味を持ちつつも、これまで拝見したことがなかったのだけれど、今回の上演作品には残念ながら余り関心を寄せられなかった。方法のシンプルさ、その潔さにはとても好感を持ったけれど、何の前提も持たない観客が見た時に、果たしてどのように見えるのか、下手をすると、一風変わったヒップホップのように捉えられてしまいかねないのではないか、その辺りの戦略（意図）について疑問が残った。

■ スズキ拓朗さん

エンターテインメントとしてのダンスの引き出しを沢山持っている方だと思った。しかしながら、ムーブメントそのものが稚拙であるといわざるを得ない。多くの人が了解出来る分かりやすい

<記号>を用いることにも、それなりの効果はあるかもしれないけれど、私個人としては、せめて<美しい暗号>のようではなければ、舞台に見入ることが出来ないと感じた。

■ 塚原悠也さん

塚原さんの作品は今回の候補者の中で唯一これまでも LIVE で拝見したことがあり、常に驚かされている。<方法論>について至って意識的であり、歴史を踏まえた上でダンスの定義を揺るがし続けている作家であると思う。ただ、contact Gonzo の上演（映像インスタレーションなどは除く）に触れてよく思うことなのだけれど、上演そのものがコンセプトを越えない、というか、コンセプトを知った時の知的興奮以上の体験を、観劇体験としてさせてくれ、という思いが沸々と湧いてくることがある。理由はまだ分析出来ていないです。

■ 木村玲奈さん

ムーブメントのクオリティや時空間の紡ぎ方など、前半が特に優れていたように思う。照明の暗さが見辛さに繋がった側面があったかもしれないけれど、私的には各ダンサーの匿名性を担保する効果として好意的に受け取ることが出来た。散漫さと密度が見事に共存し、正に目が離せない時間であった。しかし残念ながら、中盤のいわゆるユニゾンになる辺りから、少し失速したように思う。前半にあれだけ丁寧に紡ぎだされたそれぞれの時間が、<ユニゾン>という言葉に回収されてしまうような形になってしまったことが勿体なく感じた。何かもっと違った出会い方の可能性もあったのではないだろうか。それと、審査前の資料として、この作品を倉庫のような場所で上演した際の映像を事前に拝見していたのだけれど、それを見たからという訳ではなく、やはりこの作品は世田谷パブリックシアターのようなプロセニウム型の劇場を前提として作られていないということは明らかであったように思う。これら、残された課題も含めて、今後に多いに期待したい。

■ 川村美紀子さん

審査会の場で、他の審査員の方々の話を聞くにつけて、とにかくダンサーとしての評価がもの凄く高い方なのだな、という印象を持った。私は残念ながら今回が初見だったので、そのことについては何とも言いようがないのだけれど、今回の上演に限っていうと、特筆すべき点は余り見つからなかった。振付そのものに関して、ヒップホップの組み替え、アレンジ、プラスアルファ…以上のものは見当たらず、また音楽に対してはとても緻密に振り付けられていることは分かるのだけれど、細かくカウントを読んでいるという以上のアプローチを見つけることは出来なかった。彼女の素晴らしいダンスが見てみたい、という気持ちは正直にあるけれど、<コレオグラフィーアワード>に相応しい作品であったかどうかは、個人的には疑問の残るところ

るである。

■ 乗松薫さん

ユニット名、作品内容共に、〈太め〉ということを中心に押し出そうとしているように思ったのだけれど、それをコンセプトとするには太さの強度が足らず、中途半端な感じがしてしまっただ。自身の身体的特徴を眼差すよりも、もっと身体を突き放して見るようなやり方で作品を考えることの方が、自身の持っているテクニックを存分に活かし、より広がりのある作品制作に挑めるのではないかと思った。